

JICA 教師海外研修 授業実践報告書

【実践者】

氏名	澤田 将智	学校名	埼玉県立大宮東高等学校
担当教科等	地理総合	対象学年（人数）	3 年 8 組（ 3 8 名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2 0 2 5 年 1 0 月 ～ 1 2 月（全 6 時間）		

【実践概要】

1. 実践する教科・領域：地理総合		
2. 単元名と単元目標 単元名：国際理解と国際協力 国家・民族・言語の結び付きと生活文化 単元目標： 日本との共通点や相違点に着目し、多様な習慣や価値観などをもっている人々と共存していくことの意義に気付くとともに、自身の在り方生き方の現時点での最適解を模索し、考察する。 関連する学習指導要領上の目標：学習指導要領「地理総合」の目標（3） 地理に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の国土に対する愛情、世界の諸地域の多様な生活文化を尊重しようとする大切さについての自覚などを深める。		
3. 単元の評価 規準	①知識・技能	地理に関わる諸事象に関して、世界の生活文化の多様性を理解するとともに調査や諸資料から地理に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けている。
	②思考・判断・表現	地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、位置や分布、場所、人間と自然環境との相互依存関係、空間的相互依存作用、地域などに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、地理的な課題の解決に向けて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりしている。
	③主体的に学習に取り組む態度	地理的な見方考え方における基本的原理を踏まえ、国際社会の課題解決を視野に、主体的に授業に関わろうとしている。
4. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、指導観)	【単元設定の理由】 今年度の教師海外研修タンザニアコースに参加し現地で獲得した知見を目の前の学習者に還元するために、効果的であると考えた。理由は以下の通りである。 第一に、教科書においてアフリカが事例として取り扱われており、学習者の学習意欲の一定の向上が期待できることを挙げる。本校の生徒の実情から推察するに、学習意欲への生徒間で差が生じていることが想定される。そこで、教科書内容という見方だけでなく、授業者が自ら経験してきた事象を扱うことで、生徒の興味関心を引き出すことを最大の狙いとして単元を設定した。 次に、今回の授業実践のメインテーマである、生きがい・在り方生き方を考える際に、日本と異なる生活や文化を考慮する必要性を感じた。現在の日本に住む学習者として、一見異質に見えるアフリカの生活・文化に対して共感的理解を抱きながら、自らの在り方を捉えなおしてもらいたいと考えた。 【単元の意義】	

	在り方生き方教育の内容に関連する以下の項目を取り扱うことができる。 A 主として自分自身に関すること (2) 真理を探究し、より高い目標を目指し、自己の向上を図ろうとする強い意志に関すること。 B 主として人との関わりに関すること (3) 相互理解と寛容に関すること C 主として集団や社会との関わりに関すること (7) 伝統と文化の継承、国際理解、世界の平和と人類の幸福への貢献、日本人としての誇りを高めることに関すること D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること (3) 人間としての弱さや克服する強さの自覚、誇りある生き方に関すること 【児童／生徒観】 地理の授業に対しては前向きな姿勢を示してくれる生徒が多数という認識をしている。教員が話を始めても私語が止まらなくなってしまう生徒もいる。特にグループワークになると授業に関係ない話をする生徒もいるが、指示を出すことで改善される。授業内容や教員が出す指示の理解に差があり、既有知識の差も存在する。 【指導観】 多くの生徒にとって、アフリカという地域、タンザニアという国への心理的な距離が大きい状況にある。これは、地理に限った話ではないだろうが、学習意欲について生徒によって差がある本校では授業の際に留意する必要がある。授業者自身が、実際に行ってきたということをもっと前面に出していく授業を展開する必要がある。在り方生き方については、考えてくれているものの、内容についてはまだまだ浅い印象がある。
--	--

5. 単元計画（全 6 時間）

	小单元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	考查返却 イントロダクション	自分が普段考えないことについて考えてみる。	・講義 ・モチベーショングラフ	・体験談
2	多民族社会の分断と共存 多民族社会の暮らしと生活文化	I. アフリカ、特にタンザニアについての生活・文化に関する理解を深めながら、日本との共通点、相違点に着目していく。	・講義 ・討論 ・フォトランゲージ	・教科書 ・現地の写真
3	かわるアフリカと多文化共生 民族と言語からみた生活文化	II. 開発途上国と日本を比較し、タンザニアと日本について見識を深める。 (自国中心→国際的な見方の練習)	・講義 ・討論 ・フォトランゲージ	・教科書 ・現地の写真
4	生きがいの在り方を考察①	生きがいに優劣はあるのか。自分は、世界の人は何を大事に生きている？（グローバルな見方へシフト）	・講義（スライドショー） ・討論 ・ダイヤモンドランキング	・現地の人や協力隊員の方のインタビュー
5	生きがいの在り方を考察②		・講義（スライドショー） ・討論 ・ダイヤモンドランキング	・現地の人や協力隊員の方のインタビュー
6 本時	在り方生き方のとらえなおし	生きがいと生き方を捉えなおすもしくは自分の在り方生き方の再考 (グローバルな見方の練習)	・討論 ・発表 ・モチベーショングラフ ・ICT の活用	

6. 本時の展開（6 時間目）		
本時のねらい：日本とアフリカの生活・文化を比較して自分の生きがいと在り方生き方を捉えなおす		
過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5 分)	・講義：これまでの学習の振り返り（スライドショー） ○「日本にしていると気が付かないけれど、日本式生活のすばらしさがある。」 ・本時の課題の提示 ○「30 歳で成し遂げておきたいことを考える」	●投影のスライドショーに集中できるような声かけ。 ●生徒が迷子にならないように、複数回確認を行う。
展開 (35 分)	・発表準備（15 分） 生きがいチャートの項目の確認。 30 歳で成し遂げたいことを考える。 モチベーショングラフの作成。 ・グループ、会場作り（5 分） 机、いす、ICT 機器のセッティング。 ・発表（15 分） タイマーをセットし、各グループ一斉にスタート。 一人 1 分間の持ち時間で発表。 ICT 機器の活用。	●正解はない、自分自身の在り方生き方を考えることを何度も説明する。 ●机間指導を行い、生徒の記入内容に随時間いかけを行う。 ●生徒が迷子にならない声をかけに努める。 ●グループはメタモジを使い事前に決めておく。 ●発表順はグループ内の出席番号とする。 ●時間で打ち切る。
まとめ (10 分)	・まとめの言葉、感想文のフォーム入力（10 分） ○「これは高校 3 年生の時点での見通し。今後の人生の折に触れて考え直してみることが重要である」。 今回の一連の授業の感想をフォームにて入力。 タンザニアの生き方への共感。	●今回は考えるきっかけ、種まきであり、今後の人生において振り返るきっかけとする。 ●在り方生き方を授業者側から決めつけない。
7. 資料（教材）		
・教科書：実教出版『地理総合』 ・地図帳：帝国書院『標準高等地図』 ・自作授業プリント、Google スライド、メタモジ		
8. 評価規準に基づく本時の評価方法		
・各授業プリントへの記入状況、感想文の提出状況。 ・考査における授業内容（アフリカ地誌）に関する知識問題、思考力問題の結果。		
9. 学校外との連携 ※JICA 以外。なければ不要。		
・令和 7 年度道德教育推進モデル校研究授業として実施（埼玉県教育委員会、県内・他県からの視		

察)。	
10. 学びの軌跡（児童生徒の反応・変容、感想文、作文、ノートなど）	
以下、生徒の感想文の引用。生徒全員ではないにしろ、生徒にとっては何かしらの変化を促すことができたかと前向きに考えている。	
Aさん：タンザニアの人たちがとても印象に残った。生きる為に自分のやりたい職業ではなく生きる為に少しでも稼げる職業を選んで自分が今普通に暮らせていることがどれだけ幸せか感じる事ができたので後悔のない進路、職業に就きたいと思った。また、タンザニアや他の国で苦しんでいる人たちに募金やリサイクルなど何かできることがあればしていきたいと思った。 Bさん：日本ではなくタンザニアを資料として用いてくださったことで、日本との比較が出来てタンザニアの人たち考え方や、学校での勉強の学び方、その地域の生活の仕方などを知れて良かったです。日本とは違った働き方や生活をしている人たちの現状を学ぶことができて安定している日本の良さや、タンザニアの助け合いや余裕のある考え方などのそれぞれの生き方の知識が増えました。 Cさん：今学期の授業で、私たちはすごく恵まれているのだなと思いました。アフリカは日本と比べて環境が良くないですが、その分、国の伸びしろはあるのかなと思いました。ですがアフリカの生活も楽しそうだなと思いました。僕は日本という恵まれた環境に感謝し、これからの生活も楽しくいこうと思います。	

【本時または単元について、個人で振り返ったことを記載】

11. 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか	まず、自然地理的な視点について挙げる。教科書の世界がそこには広がっており、生の体験、自分で撮影した写真や動画がすべて生徒に還元できていると考えている。次に、開発教育に係る各種授業テーマを挙げる。人々の内面、在り方生き方、文化などの日本との相違点についての学びを得た。一方で、“（国際理解教育では、相違点を強調しがちではあるが）日本と変わらないものもある”、という視点に立った見方考え方があることも生徒に伝える必要性を感じている。
12. 苦労した点	アフリカ（だけでなく、“外国”というもの）に対するアンコンシャスバイアスは生徒の中にも確実に存在するように感じている。これをどのように認知させ、正しい理解に結び付けていくか、ということが非常に難しく感じる。必ずしも全員が興味を持っているとは限らないためである。また、この授業で初めてアフリカに目を向ける生徒もいることから、誤った見方をさせることが無いように言葉や生徒の発言に対するフォローに気を配る必要性があった。 また、現地の写真やエピソードなどの使い方、選び方に迷うことが多かった。生徒目線と教員目線、現地を知らない生徒と実際に行った教員との経験の差をどれだけ埋めることができるか、ということが最大のポイントであるように感じた。
13. 改善点	研修内では「ビックリ体験に終わらせない」というキーワードがあった。これのとらえ方が極端になり過ぎてしまった反省がある。そもそもの「ビックリ体験」を話すことが少なくなってしまう、生徒と共有する情報が少なくなってしまう。生徒に対して、授業者が実際に海外に行ってきたということを伝える時間をより多く確保することができれば、生徒に与える印象が違ったのではないかと考えている。生徒はどこか、“授業”という枠組みの中におり、これが実際の授業者

	の体験談であることを実感できていない様子が見受けられることもあった。
14. 成果が出た点	学期末の授業アンケートにおいて多くの生徒が、タンザニアという国について学んだことが印象に残っている感想を記入していた。本校の生徒が海外に目を向けてみることのきっかけとなる授業となった。県内外の見学者の教職員対して、教師海外研修を周知し、興味を持ってもらうことができた。 多様な授業スタイルを展開し、講義、討論、作業を織り交ぜながら生徒を飽きさせない工夫を実践することができた。生徒からも概ね好評であり、今後も継続していく。
15. 自由記述	今回は“生きがい”を授業テーマに据えた。大人でも答えを出すことが難しい問いに対して生徒はよく取り組んでいたように感じる。日本の生き方とタンザニアの生き方を直接比較することはできないものの、生徒の口からは「日本でよかった」という言葉や、「タンザニアの生き方がうらやましい」など、日本には無く、開発途上国にはあるものを捉えることができていた生徒がいた。今年度の授業実践の甲斐があったというものである。開発教育は、必ずしもすべての生徒に影響を与えることはできないと考えている。何人かの生徒が、新しい気づきを大切に捉え、今後の進路や人生に影響をあたえるものにしてもらえればよい、と割り切ることで、授業実践へのハードルが下がるのではないだろうか。 また、今年度は単発の授業ではなく、全6回の長い授業展開を行った。これにより、生徒はタンザニアという国と長い時間接することとなり、遠い国から、ちょっと遠い国と捉えることができるようになったのではないだろうか。限られた授業時間数ではあるが、来年度以降も継続して授業実践を行うことができる環境整備に努めていく。

参考資料・使用教科書

- 小川さやか（2016）．『「その日暮らし」の人類学』．光文社
- 神谷美恵子（2004）．『生きがいについて 神谷美恵子コレクション』．みすず書房
- 栗田智明、根本利通（2006）．『タンザニアと知るための60章【第2版】』．明石書店
- ハンナ・ショット（2013）．『ただいま！マラング村 タンザニアの男の子のお話』．徳間書店
- 堀江知子（2024）．『タンザニアの12ヶ月』．ロズリン出版